

史的事件を知ったのは、その年のクリスマス
を過ごした友人宅であった。

👉 コスモポリタンな 東南アジア研究

政治学研究科に所属していたとはいえ、何
よりもコーネル大学で学んだことは、デイシ
プリン(専門分野、学問領域)を超越した東南
アジア研究であった。コーネルは米国での東
南アジア研究の草分けであり、世界的にも東
南アジア研究の中心の一つであった。魅力は
教員と図書館であった。東南アジア研究創始
者の一人ジョージ・ケーヒン教授、ナシヨナ
リズム研究・東南アジア研究の権威ベネディ
クト・アンダーソン教授、奇才ジェームス・
シーゲル教授など、そうそうたるメンバーが
そろっていた。彼らからは同時代的視点の重
要性を学んだ。

図書館(当時はワットン・コレクション、
現在クロック図書館)には、植民地期からの
東南アジア諸国の一次資料が所収しと並んで
いる。夏になると全世界から東南アジア研究
者が集まってくる。そこには、コスモポリタ
ンな雰囲気醸成され、いわく言い難い魅力
と魔力があった。ちようど植民地東南アジア
の知識人が植民地にながらにして各種言語
を操り、世界が植民地にやってくる現実を享
受していたのと同じである。

👉 東南アジア研究の盛衰

そんな東南アジア・プログラムに転機を告
げる象徴的な出来事が起こった。九二年、五
〇年代から東南アジア・プログラムが置かれ
ていた建物、通称「ウエスト一〇二」が取り
壊され、新しくケーヒン・センターが建設さ
れたのである。

九一年秋から九二年春にかけて東南アジ
ア・プログラムの院生委員会の一員だった私
は、新しい研究センターの竣工式に心躍らせ
ながらも、多くの先陣の思い出の詰まったウ
エスト一〇二が閉ざされる姿を寂しく思った。
そこは、指導教授アンダーソン先生と初めて
面会した場であり、三年間欠かさず毎週木曜
日昼休みに参加したブラン・バック・ランチ
という講演会のある場であり、東南アジア研
究を志す若手研究者との交流の場であった。
政治、歴史、文学、ゴシップなど知的刺激に
溢れたウエスト一〇二の幕引きは、一つの時
代の終わりを告げるものであった。

事実九〇年代米国の東南アジア研究は停滞
期であった。既存のデイシプリンの優位がう
たわれ、地域研究には研究助成がつかなくな
り、その存在意義が危うくなっていた。それ
に歯止めをかけたのが、九七年に東南アジア
で発生した金融危機、それに伴う東南アジア
諸国の政治経済変動であった。そして民主化

とイスラームを軸に、東南アジア研究は復活
してきた。現在では、世論調査などを活用し
た数理的な研究、政策研究、開発、環境とい
う援助がらみの実践型研究が主流化しつつある。

👉 受け継がれる研究姿勢

そのような傾向のなか、新しい研究の潮流
を取り込みながらも、コーネルの東南アジア
研究は頑固な姿勢を崩さない。昨年夏には、
留学時に机を並べて勉強した友人が東南アジ
ア・プログラムの所長となった。歴史学者の
彼女を軸に、私と同世代の研究者がこれから
の東南アジア研究を支え展開していく。比較
の視点を重視した現地密着型の地域研究とい
う姿勢は、今後も受け継がれていくに違いな
い。

最後に後日談を一つ。九九年秋から一〇カ
月、コーネルの東南アジア・プログラムに客
員研究員として戻った。生来の怠け癖と九四
年以来的の教員生活の忙しさにかまけて後回し
にしていた博士論文を完成させるためであっ
た。留学時代さながらに執筆に没頭し、何と
か博士論文を仕上げ、遅ればせながら学位を
取得できた。これで国際文化教育交流財団の
ご支援によって実現した留学の最終成果に到
達したことになり、知的債務は完済したと報
告させていただきたい。

東南アジア地域研究という魅力

慶應義塾大学法学部教授、
メディア・コミュニケーション研究所長

山本信人

やまもと のぶと



国際文化交流財団奨学生（一九八九年度）。八七年慶應義塾大学法学部政治学科卒業。八九年上智大学大学院外国語学研究所国際関係論専攻博士前期課程修了。八九―九二年コーネル大学大学院政治学研究科博士課程留学。九四年より慶應義塾大学法学部専任講師、九七年同助教授を経て、二〇〇三年より現職。一一年一〇月より慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所所長。

陸の孤島コーネル大学へ

炎天下の一九八九年八月、米国ニューヨーク州イサカ市の空港に降り立った。ニューヨークのジョン・F・ケネディ空港から、イサカの隣まちエルマイラ空港を経由して、一時間余りが経っていた。乗客一〇名ほどのプロペラ機からはカユガ湖と大地の広がり一望できた。しかし、心は焦っていた。何と田舎にきてしまったことかというのが第一印象であった。

イサカに着く前に、国際文化交流財団奨学生としてフィラデルフィア郊外で六週間の集中英語研修に参加していた。ハバフォー

ド・カレッジ（当時は男子大）の学生寮に寝泊まりしながら、女子大プリンマー・カレッジでの授業に通学する日々であった。そこでの快適な生活のために、いつしかこれが米国の大学生生活だという認識を持っていた。

同時代に取り残された留学時代

ところが、イサカに着いてみると、それが錯覚であったことに気づかされた。コーネル大学のあるイサカは大学のまちといってもよい。留学当時、夏休みになるとまちの人口が半減する、といわれていたほどであった。一般の住民はどこにいるのかと思うほど、ダウンタウンには六〇年代のヒッピーのような連

●国際文化交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三一カ国の大学・大学院へ一八五名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国五四三名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

中がたむろする以外は、学生しかなかった。ただし、コーネル大学は丘の上に立っているので、学期中は減多なことがない限りダウンタウンまで降りていくことはなかった。

全米随一といわれる豊かな自然に囲まれた大学の景色を横目に見ながら、学期中は自宅と図書館とをひたすら行き来するだけであった。留学の初年度、連日朝八時からインドネシア語、九時からは英語を母語としない大学院生の必修授業であった英語ライティングがあった。インドネシア語から英語への頭の切り替えがうまくいかず、教師からの質問に英語を話しているつもりで実はインドネシア語で答えたことは数知れなかった。

専門科目の演習は、週に三日、夕方から夜にかけて行われた。政治学研究科に所属していたので、比較政治学、国際関係論に関する専門文献を週に数百頁読むという課題に直面した。それでも同期の仲間と担当を振り分けて授業前夜に勉強会を開くことで、何とか生き延びた。しかしおかげで激動する世界からは取り残され、ベルリンの壁の崩壊という歴